天狗谷遺跡 ～古代の窯址と古墳

天狗谷遺跡の発掘調査

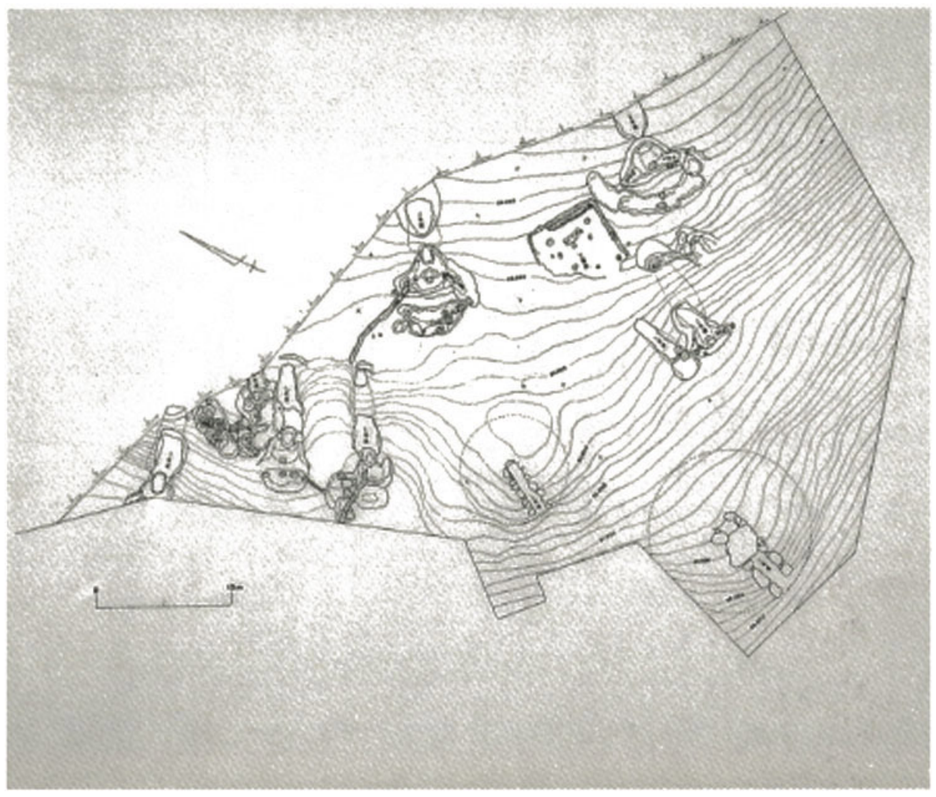
昭和59年８月から昭和60年８月にかけて、各務原市の北部山地にある天狗谷遺跡の発掘調査が行われました。その結果、横穴式石室の古墳が２基（１・２号墳）、奈良時代の須恵器窯址が9基（２～９号窯址）、平安時代の灰釉陶器窯址が１基（１号窯址）、そして、竪穴式住居址が１基（１号住居址）発見されました。また、窯本体は不明で灰原だけが確認された場所が５ケ所ありましたので（10～14号窯）、天狗谷遺跡が古墳の所在地であるとともに、規模の大きい窯場であったことが判明しました。

美濃須衛古窯跡群の窯業生産

天狗谷遺跡が所在する各務原市須衛町は、『スエ（陶）』の地名が示すとおり、いまから1400年ほど前の古墳時代から、700年ほど前の鎌倉時代まで続いた焼き物の生産地でした。なかでも須恵器という釉薬をかけない焼き物の窯が多くつくられていました。

ところで、このような窯跡はここ須衛町だけでなく、各務原市の北部山地全域から関市の南部、そして、岐阜市の東部にまでおよび、その数は130ケ所以上あります。そのため、この古窯跡群全体の名称を分布の中心地である「須衛」町にちなんで、『美濃須衛古窯跡群（以下、美濃須衛窯と呼びます）』と呼んでいます。

美濃須衛窯では、飛鳥時代（７世紀）から平安時代の前期（９世紀）にかけて須恵器を生産しており、特に７世紀後半から８世紀末までの飛鳥・奈良時代に焼かれた須恵器は膨大な量に達しました。ところが、平安時代に入ると、美濃須衛窯で焼かれる須恵器に新しい変化が現れました。それが生産器種の減少と小型食器類の大量生産という現象です。それまでは大型の甕や鉢、盤などの製品から小型の坏類まで、ほぼ全体的に生産を行っていたのですが、大型品が減少して生産の主力が小型品に移り、その後、平安時代中期（10世紀）になると、とうとう須恵器そのものが生産されなくなり、新しく釉薬をかけた灰釉陶器の生産がはじまりました。



天狗谷遺跡全体図

しかし、美濃須衛窯ではこの灰釉陶器の生産が本格化したあと、次第に焼き物の生産そのものが衰退に向かい、12世紀後半～13世紀前半の平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、灰釉陶器に代わりふたたび釉薬をかけない山茶碗と呼ばれる焼き物の時代になると、窯の数は急速に激少し、やがて廃絶をむかえることとなりました。

発掘調査の概要

発掘調査によって検出された古墳や窯址などを時期の古いものからみてゆきます。須恵器窯の8・9・12・13号窯については、そのつくられた時期は不明です。

１号墳は直径が約8mの円墳で、埋葬主体部は無袖式の横穴式石室です。規模は石室の全長が4.20mで、遺体を納める玄室部分の長さが2.00m、同幅0.96m、同高さ1.20mです。墳丘や石室が通常の古墳のイメージからすれば小型ですが、これは、出土した須恵器の年代からして、本古墳が７世紀後半につくられた終末期の古墳であるためです。

1号墳全景

1号住居址全景

1号墳出土遺物

２号墳の埋葬主体部は１号墳と異なり両袖式の横穴式石室です。墳丘の直径約12mの円墳で、石室の全長は6.1m、玄室の長さは3.10mで、幅は1.60mです。古墳の規模や形態は異なりますが、出土した須恵器からみると１号墳とほぼ同時期につくられたと考えられます。

１号住居址は、大きさが5.60×5.20mの方形で竪穴式住居と呼ばれる形態です。この時代に通常みられる竈（かまど）がなく、その代わり住居の床面中央部に炉址と考えられる焼土のかたまりが残っていました。また、床面の東側には白色粘土が置かれていたことから、この住居址は日常の生活を送るための住まいではなく、おそらく窯を焚いているある一定期間、工人たちが作業をしたり寝泊まりをするための作業小屋であったと考えられます。

時期は、出土した須恵器の年代により７世紀後半と考えられますが、この時期に相当する窯址は発掘調査で発見されませんでした。しかし、工事によって削られた灰原からはこの時期のものが多く出土していますので、おそらく、その窯に付属する作業小屋だったと考えられます。

窯址でもっとも古いものは６号窯址です。６号窯址は全長8.20m、焼成室最大幅1.80m、天井までの高さ0.90m、傾斜角度30～35度です。天井部が地上よりも高い半地下式窖窯（あながま）という構造で、時期は奈良時代中期（８世紀中頃）です。

５号窯址は全長7.00m、焼成室最大幅2.20m、天井までの高さ1.40m、傾斜角度30～35度です。

5号窯址（手前）8号窯址（奥）全景

６号窯址と同じく半地下式窖窯で時期も奈良時代中期ですが、６号窯の次に新しく、規模も一回り大型となっています。

２号窯址は全長7.80m、最大幅2.00m、高さ1.20m、傾斜角度15～35度の窯全体が地下につくられた地下式窖窯で、特に燃焼室が地下に掘り込まれた構造は全国的にも例がなく、美濃須衛窯独特の構造です。時期は奈良時代後期（８世紀後半）です。

1号窯址（左側）・2号窯址（右側）全景

７号窯址は、残念ながら発掘調査以前に工事によって窯の半分が壊されていました。しかし、発掘調査によって判明したことは、この窯は、当時窯を焚いている途中に天井が崩落したためか、窯のなかに焼成途中の須恵器が大量に残されていたのです。これらの須恵器は、当時の窯業技術や須恵器の型式編年を考えるうえで貴重な資料となります。焼かれた須恵器の型式から２号窯址とほぼ同時期と考えられます。

４号窯址は発掘調査以前に破壊を受け全体は不明ですが、現存した範囲では焼成室の最大幅が2.40m、天井までの高さ1.95m、傾斜角度20～35度と、調査された窯のなかでは最も大型の地下式窖窯です。時期は奈良時代後期ですが、後述の３号窯とほぼ同時期と考えられます。

ところで、４号窯址の灰原からは、須恵器とともに瓦も出土しています。また、同じ瓦は３号窯址の灰原からも出土している

7号窯址全景

7号窯址出土遺物

7号窯址埋土出土「花文」瓦

ので、この時期に瓦を用いた寺院や役所などの建物がこの地域に建てられた可能性があります。

その有力な候補地としては、ここから南約2kmに所在する各務廃寺（かかみはいじ）です。4号窯址から出土した瓦の表面には、花のかたちを文様にとどめたものがあり、各務廃寺からもそれに類似する「花文」瓦が出土しています。このような生産地と消費地との関係が証明できる遺跡は、古代史を考えるうえで貴重な例となります。

平安時代の灰釉陶器を焼いた1号窯址は、偶然にも奈良時代の須恵器窯である2号窯址の西隣りに位置していますが、全長5.9m、最大幅1.5m、傾斜角度38度の半地下式窖窯で、須恵器の窯にはみられなかった分焔柱（ぶんえんちゅう）という、窯を焚く際に火力を調節する構造が良く残っています。時期は平安時代後期の11世紀と推定されます。

1号窯址出土遺物

そのほか、10・11号窯は灰原のみの調査でしたが、平安時代初期（9世紀初頭）の数少ない須恵器窯であることが判明し、美濃須衛窯における須恵器生産の衰退期の実態を知ることのできる資料です。また、14号窯も灰原のみの調査でしたが、美濃須衛窯の平安時代末（12世紀後半）の山茶碗の資料として重要です。

発掘調査を終えて

天狗谷遺跡の発掘調査では、様々な性格の遺構から古代のひとびとの生活の跡をより具体的に知ることができました。おそらく、古墳はそのつくられた年代から考えて、ここに最初に須恵器の窯を築いた工人（こうじん）たちの指導者の墓であると考えられます。また、窯址の発掘調査では、須恵器の時代による型式変化や、11世紀代の灰釉陶器の生産内容、そして美濃須衛窯の終末期にあたる山茶碗の実態など、今まで不明な点の多かった美濃須衛窯の変遷が、より具体的に理解できるようになりました。奈良時代に全国的にも有数の窯場であった美濃須衛窯が、どのように発展し、どのように衰退していったのか、今後、古代史の重要な問題のひとつとして考えてゆかなければなりません。

14号窯址出土遺物

なお、発掘調査された古墳や窯址のなかで、保存状態が良好で学術的にも貴重な遺構である2号墳や須恵器窯の2号窯、灰釉陶器窯の1号窯は、平成3年に各務原市の史跡に指定され、現地において保存・公開されています。

編　集　発　行
各務原市埋蔵文化財調査センター
各務原市那加門前町3丁目1番地
TEL（0583）83-1123
平成17年3月増刷
印刷／那加印刷株式会社